



ガーナにもあります、アイスクリーム。Made in Ghana の FANICE (ファンアイス)。写真はバニラ味ですが、他にチョコレート、イチゴ、カプチーノなど数種類のフレーバーがあり、濃厚でおいしいです。

“You are invited!!” 何かを食べているガーナ人の横を通り過ぎると大抵こんな声をかけられます。「一緒にいかがですか？」というところでしょうか。ガーナに来たばかりはそのままを受け取り「ではいただきます。」と合流していました。よく観察すると、どうやらこれは社交辞令のようでした。最近では“Thank you!” と言って通り過ぎることを覚えましたが、“You are invited!!” という言葉はガーナでの大切なマナーのようです。この何かを分け合おうという精神は小さな子供達にも根付いているようで、ある時ドロドロに溶けた残り僅かなアイスクリームの食べかけを“ You are invited!! ”と言われた時はさすがに笑ってしまいましたが、言葉だけではないガーナ人の分け合いの精神は生活してみると随所を感じる事ができ、ほのぼのすることがよくあります。

さて、今月のニュースレターでは井戸先生の「野口英世の黄熱病とガーナ」が久々に登場です。研修生のガーナ滞在記と共に楽しみください。

野口英世博士の黄熱病研究とガーナ 連載第8回 ー博士の心情

本連載記事が最後に掲載されましたのは、今を遡ること約5ヶ月前の Newsletter Vol.15 で、それ以来しばらく中断しておりました。読者の中には一体あの話はどうなったのかと訝しく思われた方がいらっしゃるかも知れません。実はこの間、最近刊行の Newsletter を数号見て頂ければお分かりのように、野口記念医学研究所への要人の来訪が相次ぎました。こうしたイベント等の報告や、また本学のプロセメの学生さん達がガーナに滞在しましたので彼らの記事を優先したこと、加えて本業の研究活動の方でも極めて多忙となったため、止むを得ずの中断でした。決して暇になったわけではありませんが、野口博士がいよいよ終焉を迎えようという一番のクライマックスのところで止まっていたので、何とか時間を作り、続きを書いてみたいと思っております。読者の皆様、どうかよろしく願い申し上げます。

さて、何処まで行ったかと申しますと、野口博士がサルを使って黄熱病患者からの検体を接種することにより、少なくとも5株の病原性分離株を得たらしいこと。博士はそれらが濾過器を通しても病原性が失われないおかしなやつ(funny bug)だと呼びながら、それとは矛盾するように光学顕微鏡で見える微小だが棒状をした新しい微生物(minute rod-shaped microorganism)を発見したとフレクスナー所長に報告したこと。そしてラゴスの研究グループとの間で何かと意思の疎通がうまく行かなくなっていたことなどを書きました。野口博士の主にアカゲザルを使用した黄熱病病原体探索の研究は、大量のサルが入荷した1928年1月から2月の間に急速に進み、同



写真1 野口英世博士とアクラの人々

中央に座っている帽子の人物が野口博士。白衣を来た人たちが何人も一緒に写っていますが、この人たち全員が博士の研究を手伝っていたわけではないと思われます。（出典：財団法人野口英世記念会「フォトドキュメンタリー人類のために 野口英世」）

人以上のアフリカ人のスタッフを雇わなければならなかったのも道理です(写真1)。

博士は昼も夜も働き続け、特に夜間には集中して死亡したサル^{サル}の解剖などの仕事を独りでこなしていました。夜間はドライバーが一人と実験の手伝いをする現地人の少年が一人いるだけだと妻メリー(写真2)に宛てた3月23日付けの手紙の中で書いています。なお、この連載記事では、特に野口博士の最後のアクラの日々を研究者の視点から見詰め直すことを主眼としていますので、一般によく知られている彼が若かった頃の立身出世話や渡米後の苦労話などはすべて割愛させて頂いています。その結果、米国で結婚したメリー・ダージス(博士は彼女を愛称 **Mazie** と呼んでいた)については、これまでほとんど触れて来ませんでした。博士のアフリカ滞在中、実は何度も何度も彼女に宛てて手紙や電報を出しており、手紙のほとんどは(郵便物を運ぶ船が出る日の)明け方近くに^{した}認められています。アクラ市内を見物している時間が一切ないと嘆くほどに仕事に忙殺される中で、彼女に宛てて手紙を書くことが唯一の心の慰み・拠り所だったのでしょう。1月初めに体調を崩して8日間入院して以来、博士はラゴスからアクラに派遣されていたマカフィー博士夫妻の家に世話になることになりましたが、研究所からその家までの距離が約3マイル離れていたと書かれています。現在でも彼の研究室があったコレブ地区から車に乗ると、市内の中心部とは異なり、あまり人通りが多くありません。ましてや当時のことです。ほとんど毎晩、真夜中、あるいは早朝の真っ暗闇の中で移動していたことになります。通勤に使うことが出来たドッジの車の中で博士はいったい何を思って研究所との間を行き来していたのか、アフリカの夜の漆黒の闇を知る筆者などはその情景を想像するだけで胸が苦しくなります。

博士が絶命するまで、いよいよ残された時間は2ヶ月を切りました。これから先は、野口博士の書簡等を元に、時系列的に彼の行動記録などをかいつまんで書いてみたいと思います。

年3月にはサルからサルに接種によって伝播し得る9株を単離したとニューヨークのフレクスナー所長に報告しています。それらの病原体は濾過器を通過する程に小さく、野口自身が「ウイルス」という言葉を使って表現しているにも拘わらず、光学顕微鏡下で見えると主張していた点に明らかに何らかの誤謬があることはさて置いて、博士が単離・発見したとされるイクテロイデス菌から作製した、いわゆる「野口ワクチン」や回復期患者の血清を用いたある種の中和抗体確認試験を含む防御効果を検討する実験などもこの頃には展開しています。約400頭余りのサルを飼育しながら動物感染実験を行うという現代では到底考えられない大規模な研究を遂行するためには、常時約40



写真2 野口英世の妻メリー・ダージス

(出典：野口研究所のアーカイブ資料として保管されていたデジタル・データから、筆者が独自に入手)

-3月25日付けニューヨークのロックフェラー財団国際本部長ラッセル博士宛の手紙-

野口は直接の上司であるフレクスナー所長宛は勿論、このラッセル博士にも比較的まめに手紙を書いており、研究の進行状況などを詳細に報告しています。おそらくラゴスとの関係を円滑に進めることを意識してそうしたのでしょう。この手紙では、ワクチン効果を調べた実験結果や回復期の患者血清を用いた中和試験、更には蚊を用いた伝播実験などについて触れていますが、接種後のサル病態が現れるまでの日数や発熱の有無など、結果が不安定であることを正直に述べています。その他、この手紙ではそれまでは研究の詳細を伝えないまま、ただ黙々と病理切片の作製などを助力してくれたアクラの研究所長ヤング博士に、野口がやって来た研究内容を説明し、眼の前で再現して見せることで数々の発見を確認・同意してもらうことを決め、前日からそれを始めたとしています。ヤング博士の誠実な協力に謝意を示すと共に、快く野口に研究施設の一部やその他種々の便宜を提供してくれた英国の関係者に対する礼儀でもあると考えたからでした。

-4月2日付けフレクスナー所長宛の手紙-

この手紙では、彼が単離したと信ずる病原体を **bacillary organism** と呼び、その熱処理(65℃、15分間や80℃、15分間)に対する異常な安定性を報告しています。その少し前にベルギー領コンゴのマタディ(現コンゴ民主共和国バ・コンゴ州の港町)から、手違いで冷蔵庫に入れられずに通常の郵便物で送られて来た患者材料からも病原性分離株が得られたこと。灼熱の炎天下に長時間晒された検体の中にすら病原体が生き続けていたその驚異的な熱安定性に触発されて、ストークス博士らが前年の6月頃ラゴスで最初に行った黄熱病患者血液のアカゲザルへの接種実験の結果死亡したサルの材料(11月に野口がアクラに到着した時、その検体の一部がアクラに運ばれて冷蔵庫にそのまま保管されていた)を試しにサルに接種したところ、驚くべきことに其処からも分離株が

得られたことなどが報告されています。サルが何故に次々と斃れていったのか、こればかりは実験ノートも残されてなく、またすべての研究材料が処分されて残っていない今日となっては謎としか言いようがありませんが、これらの材料のいずれにも、普通なら見逃してしまうありきたりの形をした桿状の微生物が顕微鏡下に見えると野口は書いています。おそらく博士は、孢子を作るバチルス属の細菌の混入を黄熱病の病原体と見間違っただけのものと思え、それと同時に当時の濾過器の穴のサイズは今日とは比較にならないほどにバラツキがあり、ある程度小さい細菌ならば濾過器を通過することがあったのかも知れません。この手紙の最後の方で、5月の12日か19日頃にアクラを離れてニューヨークに戻る予定だと書いています。この時点では、ラゴスのビウキス所長がアクラに居る自分に会いに来たことは一度もないから、自分がラゴスに行くことも重要ではないと思うと書き添えています。この予定が覆され、急遽アフリカを離れる前にラゴスを訪れるべく変更となったこと。また野口がアフリカを去る日が迫りくるという慌ただしい時間の中でヤング博士が病理切片作りだけではなく、より深く野口の仕事に関わることによって、間もなく自らの運命まで狂わされることになるうとは、いったい誰が予想することが出来たのでしょうか。



写真3 野口博士のスケッチ画

米国からアクラに来ていた留学生が野口博士をスケッチしたもの。(出典：野口研究所のアーカイブ資料として保管されていたデジタル・データから、筆者が独自に入手)

-4月7日妻メリーに宛てた野口の手紙-

この手紙では、愛する妻からの手紙が一向に届かないことを案じながら(注. 彼女は電報を何度か出したものの、手紙は書かなかったらしい)、どうやら自分は黄熱病の病原体を発見したと思うと簡単に告げながら、アクラの研究所の所長にすべての研究内容を見せるために、あと6週間から7週間は掛かるので、帰国は5月の終わり頃になるであろうと書き綴っています。当地での生活は、汗を沢山かくものの、人が思うほど(アクラの)気候が悪いわけではなく、至って健康であるから心配するなど書きながら、しかし一方で、500頭ものサルを飼育管理するために、40~50人もの人間を雇わねばならず、日夜神経のすり減る仕事であることを彼女に吐露しています。

It is full moon here now and while coming back and forth from the laboratory at night I get very sad to think about your being left alone so long. But, this will be all over soon, so do not worry.

... With love and kisses

Your own

Hide

野口博士が1月に入院して退院した後に、アクラを訪れていた米国の留学生によって書かれたと思われる野口博士のスケッチ画が残されています(写真3)。このスケッチに見える博士の顔は、病気から回復して一見穏やかな表情をしているようにも見えますが、一方、どこか空ろで疲労困憊の表情をしているようにも見えます。ある程度山場を越えて先が見えて来たと判断し、帰国の日を口にした博士の心境は、いったい如何なるものであったのでしょうか。野口博士絶命の日まで、残された時間はあと1ヶ月と少々。この続きはまた次回に。(井戸)

ガーナ滞在記 -伊藤佳史(ウイルス学部)

「吊り橋を渡るのではなく、地に足をつけて歩き回りたい。」

私たちはカクム国立公園で熱帯雨林にかけられた地上30mもの吊り橋を渡りました。吊り橋からは俯瞰して見えるけれど、実は下の様子は良く見えません。背の高い草木の陰になっていて、アリの大群が黒い帯を作っていることや白い花がひっそりと尾の長い蝶々と待ち合わせしていることなど到底分からないのです。ややもすれば私たちはアフリカを大局的にとらえがちかもしれません。例えば感染症に関するデータなど情報不足は否めません。地域差、貧富の格差、多様な側面をもつアフリカを把握することの難しさを痛感しました。私たちが見ているのは大きな草木の葉かもしれません。その下に広がる

陽のあたらない世界を知らないのかもしれませんが。もっとそんな世界を自分の足で歩いてみたいのです。

私にとってガーナ滞在中に最も困った瞬間、それは急に電気が止まって真っ暗になった時ではなく、断水でシャワーを浴びられない日が続き4日目の朝に蛇口を捻れど水はでなかった時でもありません。

「我々の病院を見て回ってどうだった？」

海辺の市立病院にてそう聞かれた時です。私はその質問を予想していたにもかかわらず、固まってしまいました。暑苦しい病室に点滴だけで横たわっている患者たち。老朽化した病棟。潮のせいか壊れ、使われていない医療機



カクム国立公園
揺れる吊り橋にイライラする佐々木君と加藤さん

器。医師が足りない。強烈に私の心に迫ったものは全てネガティブなものでした。しかし、それをそこで言うほどの勇気が私にはなかったですし、そこまでの相互理解もありませんでした。だからこそ「無難なことを言わないと」、「少しでも感謝を伝えないと」という焦りをもって悩んだ後、妊婦が多かったことなどを感想として挙げました。このことは今も心に引っ掛かり続けています。そのときは失礼なことを言っただけでいいという思いで、素直なことは胸に無理やりしまい込みましたが、本当のことを言い、アドバイスしていかないと何も変えられないでしょう。私にはまだ自分の発言やアドバイスを納得させる専門性も相互理解もありません。いつか私はそのような力を身に付けてより良い医療環境となるよう、ほんの小さなことでもお手伝いできればとおこがましくも感じました。



宿泊した学生寮の前で

「医療人として課題に立ち向かっていく勇気と自覚を持て。」

今回の留学でお世話になった方々や光景すべてがそう私に訴えかけているように感じました。規模は違えど様々な問題が私たちの前には立ちまだけています。それを解決するのは自分たちだと意識し、たくさんの人からうけた大きな恩を返せるよう、この経験を活かし良き医療人となれるよう精進していきたいと思います。

ガーナ滞在中はたくさんの人にお世話になりました。井戸先生にはアフリカで研究をすることに対する姿勢、志村さんにはガーナ人と堂々と接することを学びました。また鈴木先生夫妻、柏原さ

さん他野口研の皆さんのおかげで私たちはガーナを最大限感じられました。現地の日本人の方々の、海外にて誇りを持ちつつ現地人と信頼を深める姿には日本の良さを感じました。さらに、野口研スタッフやガーナ大学の学生、入れて頂いたサッカーチーム、そして見学させて頂いた病院など、親切かつwelcomeな性格で私たちに寛容に接して頂いたガーナ人に感謝致します。私は寮生活を共にする4人の同学年の仲間にも恵まれ、それぞれの考えや個性に刺激されました。最後となりましたが、本学の関係者の方々はじめ、日本そしてガーナにてお世話になった全ての方々に感謝致します。ありがとうございました。メダーシ。

少し心に残っている言葉を紹介させて下さい。

Dr.Brandful(野口研)「アフリカにマイナスのイメージを持つ人が多い。君たちにはここで経験したプラスのイメージを伝えて欲しい。」

栗田医務官(外傷センター見学にて衝撃的な光景の数々の前で)「説明はしないから、しっかり目に焼き付けなさい。」

井戸先生「やりたいと思ったことはその時しなさい。そうしないと今度その機会が巡ってくるかは分からない。特にアフリカではね。」

田村日本人会会長「自分のできる範囲でいいから一人一人が少しずつ頑張ればいいんだよ。」

ガーナを出て、もう2か月半も経ちます。帰って来たばかりのころは電車が分刻みで発車することに慣れませんでした。が、だいぶ日本の時間感覚に戻ってきました。いっしょに留学したほかの4人のような素晴らしい文章を書くのはぼくは苦手なのでご容赦ください。

行くまで「アフリカ」というイメージはあってもガーナはどういうところなのか、ちゃんとはわかっていなかったのですが、ガーナに留学できて本当によかったです。楽しかったです。

まずアフリカに行きたかったというのが達成されたこと、またガーナは目立つ動物は少ないですが熱帯のアフリカの動植物を見られたこと、日本のような物事が忙しすぎるくらいとんとん拍子で進むのではなく、研究内容で苦勞するというよりも「研究をすること」に苦勞すること、そしてなんとかちゃんと研究できたことなど、日本では絶対にできないことでした。今となっては停電・断水もいい思い出です。

また人間関係もガーナで得られたことのひとつです。

医学生として普通に生活していたらほとんど交流のないような大使館の方、一般企業の方、国際協力関係の方などと密に話すことができました。またガーナ人はもちろんガーナ滞在の日本人の方々には本当にお世話になりました。手あかのついた表現で本当は使いたくないのですが、「人の温かみ」って言うのはこういうことをいうのだと実感しました。日本にいたら自宅の水が止まったからといっていろんな方の自宅のシャワーを借りたりしないでしょう！

しかし、自分の中の変化で一番大きいのは、今まではほとんど接点のなかったガーナ人と仲良くなり、ガーナの文化を知り、アフリカやそこに暮らす人々、ガーナ人を身近に感じられるようになったということです。そろそろガーナ食を食べたくなってきましたし、ガーナ人のRAたちとも話したいです。TICAD V 関係でテレビや広告などで「アフリカ」とか「ガーナ」とあると思わず見てしまいます。

最後に、今回の留学を支えて下さった方々に感謝します。ありがとうございました。



そろそろ食べに行きたいガーナ大学の食堂のご飯
(ジョロフライスとフライドプランテーン)

ガーナの日常風景から ―おんぶ

感覚的にですが、ガーナは何となく赤ちゃん人口が多いような気がします。そして、よく目にして印象的だと思う光景の一つに、お母さんの背中におんぶされた赤ちゃんの姿があります。写真のように布でくるくると巻き付けるだけなのですが、肩の支えもなく落ちる事はないのかなといつも心配してしまいます。写真の子は1才近いのでおんぶのされ方も板についていますが、生まれたての首の据わらないような赤ちゃんでも、頭だけが外に出ている格好で首が布の際でグラグラして苦しそうに見えながらも、しっかりとお母さんの背中に固定されて安心してスヤスヤ寝ています。

おんぶの方法は日本と少し違って、赤ちゃんは過酷にも大の字にさせられ、お母さんの体に腕と足でしがみついている形になり、お母さんはそれを布一枚で包み込み胸とお尻で支えます。ガーナ人の体型だからこそできるおんぶかと思って私も試してみましたが、意外にしっかりといてズルズルッと落ちることもありませんでした。たまに赤ちゃんをおんぶして、頭に物を乗せて猛然とダッシュしている路上での物売りのお母さんを見かけてびっくり仰天することもあります。(志村)



1. 背中に乗せて



2. 布を用意



3. 布の上部をギュッと



4. 胸の上で交差して挟み込みます



5. 同様に布の下部もギュッとねじり込みます



6. 赤ちゃんの足がお母さんの両脇に伸びています

Nguyen Huu Tung	長崎国際大学	4/14-27
森永 紀	長崎国際大学	4/21-26
山岡昇司	東京医科歯科大学	5/5-10
堀 泰徳	東京医科歯科大学	5/5-17
宇都拓洋	長崎国際大学	5/21-25



編集後記

6月1日～3日、横浜において「第5回アフリカ開発会議（TICAD V）」が開催されました。その開催に合わせ、前号の来訪者リストでご紹介した東京芸術大学の小沢剛先生による「小沢剛 高木正勝 アフリカを行く」と題した展覧会がヨコハマ創造都市センターにて5月25日(土)～6月9日(日)まで開催されています。小沢先生は野口英世の足跡を訪ねガーナにいらっしゃった際に野口研を取材されました。展覧会では以前ご紹介したガーナの看板アートの手法で野口英世の人生物語を描き出した作品が展示されるそうです。このニュースレターと深い縁があり興味深い展覧会です。残り僅かな期間ですが、ご興味のある方はお出かけ下さい。

<http://www.jpf.go.jp/j/culture/new/1304/04-03.html>